

見よ。

2007. 12. 18 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ルカの福音書 2章1節から20節まで

そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、身重になっているいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現れて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

司会の兄弟はいつもメッセージの前に質問するのです。「今日の題名は？」と。『見よ』ではなく、別の題名を使ってもいいですね。『ホームレスのために来られた主イエス様』ではどうでしょうか。

先日天に召された K 姉妹が、次のように書いたことがあります。「病気を通して、主イエス様のことがなお一層好きになった」と。何故なお一層好きになったかと考えてみますと、

病氣を通して、イエス様をよりよく知るようになったからだと思います。

キリストを知るとき、一番大切な目的はそのことではないかと思うのです。すなわち、「あなたはイエス様が好きなのか?」「心から愛しているのか?」と。イエス様を信じている人々は数えきれないほど沢山います。しかし、イエス様を心から愛している人は少ないのではないのでしょうか。

イエス様を愛する根拠は、イエス様をより深く知ることであり、イエス様をより深く知る条件とは、「悩む」ことです。いろいろなことで苦勞することではないのでしょうか。何の悩みも苦しきもなければ、誰も助けを必要としません。そのような人々こそ気の毒です。それは「助け主」を知ることがないからです。

それで、パウロは既に救いにあずかった人々に大変厳しいことばを書いたのです。『主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。(第一コリント16:22)』と。のろわれることとは、地獄に行くことではなく、祝福されない、用いられない、ということです。パウロの同労者デマスは、そういう男のようでした。聖書は彼について何と語っているかと言いますと、『デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまう…(第二テモテ4:10)』。彼はパウロから離れただけではありません。イエス様よりも「この世」を愛するようになったということです。悲劇的ではないのでしょうか。

ホームレスのために来られたイエス様こそ、全ての「栄光と誉れ」をお受けになるべきお方です。

以前、アメリカの飛行場に一人の男が立っていました。彼は大きな看板を見せたのです。それには、ただ一つのことばしか書いていなかったのです。『ホームレス』と。彼が言いたかったことは、「助けてもらいたい」ということです。

放蕩息子もホームレスだったのです。彼は家に帰っても、ホームレスになってしまいましたから受け入れてもらえないでしょう。召使いとしては受け入れられるかもしれませんが、「息子」としてでないとなれば、「我が家」とはなりませんから。しかし父親は、「速く速く最も素晴らしい着物を持って来て!」と言って彼を迎え入れたのです。最も素晴らしい着物、なのです。イエス様とは、そのような本当に愛と憐れみに満ちたお方なのです。

時々、一人のホームレスのような男が二階の玄関まで来て、いつも「金が欲しい。今回が本当に最後ですから…」と言っては、再び来ます。その男についていつも残念に思うのは、彼は金だけもらえば満足しているということです。「金」だけではなく、「永遠の宝」について要求されれば嬉しいのですが…。すなわち「心の平安が欲しい。変わらない喜びを欲しい」というプラスアルファがつくなら良いのですが、そのような人々は、一時的な問題だけ解決されれば満足してしまうのです。人間とはそういうものでないのでしょうか。

イザヤ書 7章14節後半

「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」

聖書の中に、今読まれましたように、「見よ」ということばが何回も何回も出てきます。意味は、目に見える現実はどうであれ、前向きに生活しなさいということです。主は創造主として新たなものを創造し、また主は支配なさるお方であられるのですから、私たちは全てを安心しておゆだねすることが出来るのです。更に主は、「救い主」であられるばかりではなく、近いうちに再臨なさる花婿でもあられます。

また、イザヤは次のように書いたのです。

60章2節

見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている。しかし、あなたの上には主が輝き、その栄光があなたの上に現われる。

「見よ」。「見て！見て！何千年も前に約束された救い主が来るよ！」と、イザヤは伝えたのです。イエス様が来られることについての、二千年前の預言です。「見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている」。これは今の世界の状態ではないでしょうか。続いて書いています。「しかし、主が輝き、その栄光が現われる」と。つまり、主は近いうちに再臨なさるのです。

またバプテスマのヨハネは、最初にイエス様を紹介した兄弟でした。彼も同じことばを使ったのです。

ヨハネの福音書 1章29節後半

「見よ。世の罪を取り除く神の小羊。」

救い主は、人間の欲しいものを与えようとはなさらないお方です。しかし人間にとってどうしても必要なものは必ずお与えになります。ですから、私たちはどういう問題をかかえていたとしても、主は必要のない悩み、問題、苦しみ、病気をお与えになることはない、と主の御手からいただきます。私たちのような者を救うためにと、イエス様は自発的に喜んで、ご自身を犠牲にしてくださったのです。私たちの受けるべき罪に対する天罰をお受けになり、救いの道を開いてくださったのです。

ヨハネの福音書 19章30節

イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した。」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。

救いのみわざは成し遂げられたのです。万歳！ その時、聖なる神と罪にまみれた人間との間の壁が取り除かれたのです。

ですから、マタイも書いたのです。

マタイの福音書 27章51節前半

すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

下から上までではないのです。普通でしたら、下から上になるのではないのでしょうか。違うのです。上から下まで。それまでは祭司だけしか入れなかった所に、誰でも自由に入れるようになりました。

復活なさり昇天なさったイエス様は、ヨハネにおっしゃったのです。

ヨハネの黙示録 1章17節後半、18節

「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。」

「見よ。わたしはいつまでも生きている」。

この主イエス様は、再臨のことをはっきり約束してくださいました。

ヨハネの福音書 14章3節

「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」

素晴らしい約束です。いわゆる「空中再臨」についてパウロは書いたのです。コリント第一の手紙の15章51節。ここで「見よ」ではなくて、違う表現が使われていますが、意味は同じです。

コリント人への手紙・第一 15章51節、52節

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

すなわち「ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです」。これこそ大切だと、パウロはコリントにいる兄弟姉妹に書きましたので、「聞きなさい」ということばを使ったのです。

何年前のことでしたが、十年間寝たきりの姉妹がいました。はっきり覚えていませんが、T姉妹でした。姉妹のことを覚えている方々もいらっしゃると思いますが、姉妹はもちろん手足も使えませんし、人間的に考えれば大変な苦しみだったでしょう。しかし姉妹は、時たま具合の良い日があると、一本の指を一ミリぐらい動かすことができたのです。それだけです。しかし、これこそ彼女にとっての助けとなったのです。彼女が指を動かせば、コンピューターを通して自分の言いたいことを表わすことができたのです。私たちは見舞

いに行く何時間か前に電話で連絡をしておかないと、その日に指が動くかどうかわかりません。彼女との交わりは大変な時間を必要とします。けれどあるとき彼女は次の文章を書いたのです。「痛みのかたまりです。だからいつも祈っています。耳も聞こえなくなったし、食べることもできません。ラッパの音を待つばかり」と。しかし彼女は再臨まで待たなくてもよかったのです。先に天に召されましたから。「ラッパの音を待つばかり」という考えは、姉妹の生きる希望そのものだったのです。

昔、エノクという男がいました。彼はイエス様の再臨について、既に預言したのです。  
ユダ書 14節

アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」

「見よ」。ここにも、「見よ」ということばが出ています。これは、もちろん「空中再臨」についての預言のことばです。

そして、ヨハネも当時の信じる者を励ますために書いたのです。

黙示録 1章7節前半

見よ。彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。

イエス様ご自身も、はっきり語られたのです。

黙示録 22章7節

「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」

20節

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

何度も「見よ」、「見よ」と書かれています。その意味は、主がこの世に来られたことについて考え、そして感謝せよ。主イエスの犠牲について、支払われた代価について考え、礼拝せよ。そして、主の再臨を毎日待ち望みなさいということです。

ルカ伝の2章に素晴らしい喜びの知らせが書き記されています。2章9節からもう一度読みます。

ルカの福音書 2章9節から13節

すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがた

のために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つめます。これが、あなたがたのためのしるしです。」すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現れて、神を賛美して言った。

本当に、この賛美をちょっと聞きたかったですね。素晴らしいことでしょう。ここでは、人間についてではなく、天の軍勢について書かれています。多くの天の軍勢が神を賛美した、と。きっと素晴らしい賛美だったのではないのでしょうか。

#### 14節

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」

つまり、「恐れることはありません」。これこそあらゆる心配からの解放です。「あなたがたのために、救い主がお生まれになった」と。

私たちも誇りを持ってこのように言えるのではないですか。「私のために救い主がお生まれになった」と。間違いなくそうです。

クリスマスの時に、人々は贈り物についていろいろと語り合い、また話し合うものでしょう。子ども、大人、貧しい人、金持ち、孤独な人、多忙な人たちが、贈り物を買うために忙しくしています。しかし、それだけではなく、主なる神もまた、私たち人間に贈り物をしようとしておられるのです。主なる神は、非常に気前のよいお方です。こそこそしたことや、けちけちしたことを全く知らないお方です。主は富んだ所に住んでおられ、その満ち満ちているものの中からお与えになられるお方です。罪人の私たちのために、ひとり子なるイエス様を与えられたお方です。ベツレヘムにおいて主なる神の愛は、純粋な完全な形をとって、自らを啓示されたのです。主なる神は、第二次的なものを与えられたのではありません。その最愛の「ひとり子であられるイエス様」を与えられたのです。聖書の中で一番よく知られている箇所は、ヨハネ伝3章16節でしょう。

ヨハネの福音書 3章16節

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

「世を愛された」とは、人間ひとりひとりを愛されたのです。

またヨハネは、その第一の手紙4章9節に、

ヨハネの手紙・第一 4章9節

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

マルコの福音書 12章6節

その人には、なおもうひとりの者がいた。それは愛する息子であった。彼は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう。』と言って、最後にその息子を遣わした。

と記されています。

弟子たちの証しは、ヨハネ伝1章14節に書かれています。

ヨハネの福音書 1章14節

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

「ことばは人となって」とは、イエス様は人間となられた、ということです。

当時の人々は、この贈り物に対していったいどういう態度をとったのでしょうか。

・イエス様を産んだマリヤは、初めは、何のことであろうかと思いを巡らしていました。

ルカの福音書 1章30節から32節前半

すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。」

34節、35節

そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。」

38節

マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

・ヨセフの態度は、いったいどういうものだったのでしょうか。

マタイの福音書 1章19節

夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にしたくはなかったので、内密に去らせようと決めた。

24節、25節

ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、

そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。

確かにヨセフは、初めは、いったいどういうことなのか、と考えばっかりしたでしょう。けれど、御使いが彼に全てのことを明らかにした後に、ヨセフは主のみことばに従う決心をしたのです。理解できませんでした。説明することもできませんでした。けれど、従いました。

・祭司の妻エリサベツの態度はどういうものだったのでしょうか。彼女は非常に幸いな者で、賛美がくちびるの上にのぼりました。そして彼女はマリヤとともに、この大いなる贈り物に対して、主に心から感謝し喜びました。

ルカの福音書 1章42節

そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。」

44節、45節

ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳にはいったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」

しかし、全く違う態度をとった人々もいました。イエス様ご自身が、この悲しい事実について、またその理由について、はっきり言われました。

ヨハネの福音書 3章19節

光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。

・当時の宿屋の主人は、その贈り物を理解することができなかったのです。彼はいかなる贈り物が彼にもたらされたかということに気がつかなかったのです。彼らを休ませる余地がない、と断りました。彼はこの贈り物の価値を認識しなかったのです。

ルカの福音書 2章7節

男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

場所をつくろうと思ったなら、必ずあったはずです。

・当時の王様であるヘロデ王は、ひどく残忍な気持ちを持つようになったのです。自分の王国を失うのではないかと思いましたので、そのことを聞いて不安を感じました。ヘロデ

王は、この贈り物が彼に対して永遠の王国に到るための戸を開けるであろう、ということを知ろうとしなかったのです。

マタイの福音書 2章8節

そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。「行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。」

彼（ヘロデ王）は大嘘つきです。

13節から16節前半

彼らが帰って行ったとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現われて言った。「立って、幼子とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい、そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した。」と言われた事が成就するためであった。その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかったと、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。

ここで、また「見よ」と出てきます。

全く違う態度をとった人ももちろんいました。例えば、

・羊飼いたちは、目で見、耳で聞き、そして急ぎ足で主を賛美しながら、ベツレヘムへ向かった、とルカ伝2章に書かれています。

・また、外国から来た博士たちについても書かれています。

マタイの福音書 2章10節

その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

つまり、待ち望んでいたからです。

11節

そしてその家には行って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。

と記されています。

・待ち望む思いに満ちあふれた一人の老人もいました。シメオンという男です。そして彼は、「今や、長い間待ち望んでいた救い主を見ることができた」と証しました。彼は、幼子を腕に抱き、主をほめたたえたと語られています。

ルカの福音書 2章27節から30節

彼が御霊に感じて宮にはいると、幼子イエスを連れた両親が、その子のために律法の慣習を守るために、はいって来た。すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」

・もう一人アンナという年配の女性がいました。彼女も主に感謝をささげ、そして幼子のことを、エルサレムの救いを待ち望んでいる全ての人に語ったと記されています。

ルカの福音書 2章36節から38節

また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、その後やもめになり、八十四歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。ちょうどこのとき、彼女もそこにいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。

当時、自分の救いの必要性を認めた全ての人々は、救い主の現われを心から待ち望みました。そして、約束された救い主の出現を待ち望んでいた全ての人々は、この方が出現された時に、その方がどういうお方であるか、ということを知ることができたのです。そして、そのことを知ることができた人々はだれも、この方を喜んで受け入れたのです。けれど大多数の人々は、「この方、すなわちイエス様」を受け入れようとしなかったのです。つまり、拒んだのです。

ヨハネの福音書 1章11節

この方はご自分のくじに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。

と記されています。

彼らの心の目は暗くされていたので、自分たちがイエス様を必要としているということがわからなかったのです。宗教的な指導者たち、当時の聖書学者たちは、全く無関心でした。イスラエルの民もその影響を受けて、悔い改めようとしませんでした。そして、ヘロデ王はこの方を殺そうと計画したのです。すなわち、イエス様を待ち望まないということ、また、イエス様を求めないということはイエス様を拒んでいることで、これほど愚かなことはありません。

博士たちは「真理」を知りたかったので、出かけて、救い主を拝しました。羊飼いたちも、救いを求めましたから、導かれたのです。御使いは彼らに言った。「恐れることはない。今、私はこの民全体のための素晴らしい喜びを知らせに來たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」と。

さて私たちは、この大いなる贈り物に対してどのような態度をとるのでしょうか。

マリヤのように驚き、そして、「おことばどおりになりますように」と願うのでしょうか。ヨセフのように、びっくりしてから、従順に従うのでしょうか。エリサベツのように、「全く幸いな者」と唱えられるのでしょうか。宿屋の主人のように理解することができなかつたり、ヘロデ王のようにひどく残忍な気持ちを持つのでしょうか。

当時二つのグループに分けられるようになりました。いつの時代でもそうですが、三つの実例を見て終わりたいと思います。

\*一番目の実例は、イエス様がお生まれになった時です。

主を真剣に求めた人々がいましたが、エルサレムの住民たちや聖書学者たちは、心から「救い主」を求めたいという気持ちがなかったのです。彼らは日々の生活に追われ、自分自身のことまで心がいっぱいでした。そして、まことの救い主なる神を求めようという気持ちがなかったのです。彼らは、自分の病気、自分の悩みなどの一時的な問題を解決してほしいという気持ちだけでした。彼らの根本的な問題である「罪の問題」を解決して欲しいという気持ちはなかったのです。また聖書学者たちは、聖書について多くのことをよく知っていましたが、聖書が語っている「生けるまことの神」に対しては、全く盲目でした。彼らの求めていることは人から認められることであり、自分自身の力で道徳的に高い生活をするのでした。そして彼らはこの世に来られた「救い主」に対しては、全く背を向けていました。ヘロデ王は意識的にイエス様に対して敵対し、イエス様を即座に殺そうとしました。彼の求めていたことは、自分のたましいの救いではなく自分の名誉であり、力であり、快樂でした。

\*二番目の実例は、エリヤの時代のことです。

カルメル山に多くの人々が集まりました。エリヤは「主なる救い主」だけを求めたのです。しかしイスラエルの民は、イエス様がお生まれになった時も、エリヤの時代も、どっちつかずの立場で、よろめいていました。彼らは生けるまことの主に仕えることも、偶像に仕えることも、決断することができなかったのです。エリヤの時代のイスラエルの王であるアハブは、まさにヘロデ王のように主を拒否し、その結果憎しみを駆り立ててエリヤを殺そうとしたのです。初代教会の人々の中にも、このような三種類の人々を見出すことができました。

\*三番目の実例は、熱い、なまぬるい、冷たい、ということばで表わされています。

マリヤ、当時の博士たち、羊飼いたち、シメオン、アンナたちは、熱い人たちに属していました。彼らの心は、主に対して燃えていたのです。

詩篇の作者であるアサフは書いたのです。

詩篇 73篇25節後半

**地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。**

パウロもローマの刑務所の中で書いたのです。

ピリピ人への手紙 3章8節

…私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

イスラエルの民は、イエス様のお生まれになった時も、エリヤの時代にも、熱くも冷たくもないぬるま湯のような状態でした。こんにちでも同じようなことが言えます。聖書に対して反対する気持ちを持たない人々は少なくありませんが、そのことを真剣に求めて読む人々はわずかではないでしょうか。ヘロデ王やアハブ王のように、自分自身の利益だけを求めて、主なる神に対して心を全く冷たく閉ざしている人々が少なくありません。けれど私たちは、この中のどのグループに属しているのでしょうか。

イエス様は、私たちが救うために、解放するために、「救い主」としてこの地上に来られました。このことは、主なる神が私たちに対して悔い改めと信仰を求めておられることを示しています。悔い改めと信仰は、私たち自分自身から出るものではありません。主なる神を切に求める人、主のみことばを聞きたいと思う人に、主から必ず与えられるのです。

イエス様は、救い主としてだけでなく、王としてこの世に来られ、私たちに従順と自分を無にして仕えることを求めておられます。けれどこれも、私たちが自分の力によって行なうことはできません。恵みとして主から与えられる生活態度です。この恵みは、主に従って生きたいと思う人に与えられます。

もう一つ。イエス様は主としてこの世に来られ、私たちの真実と愛とを求めておられます。けれどこれも私たちの内から出るものではなく、ただ主のみに栄光を帰したいと思う人にだけ、主から与えられる賜物です。

イエス様が私たちの心のうちに住んでくださることは大切です。しかし、それだけにとどまらず、主が私たちの全生活の支配者となってくださらなければなりません。多くの人々は困ったとき、必要なときだけ主に求めようとしますが、自分自身の支配権を主に明け渡すことは望んでいません。私たちの生活のうちほんのわずかでも主にささげていない部分があるなら、それは悪魔の付け入るかっこうの口実となります。

もしイエス様が私たちを支配なさり、導き、満たすことがおできになるなら、私たちの生活は本当に祝福され、実を結ぶものとなることができるのです。

了